

機関番号：17701

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2008 ～ 2010

課題番号：20320025

研究課題名(和文)

YAMATO-Eからみる日・英・米の日本美術史観に関する比較研究

研究課題名(英文)

A comparative study on the views on Japanese art history in Japan, the UK, and USA through research on the handling of Yamato-e

研究代表者

下原 美保 (SHIMOHARA MIHO)

鹿児島大学・教育学部・教授

研究者番号：20284862

研究成果の概要(和文)：

本研究の主な成果は以下の2点である。

(1) 明治期における英・米の日本美術コレクション及びその分類、画史・画論書の所蔵状況、研究者やコレクターの書籍類を確認した。その結果、英国では、主に taxonomy (分類学) に基づき日本美術が収集され、これらを基に体系化した日本美術史形成が行われていたことを確認した。一方、米国では各々のコレクターが意識的に作品を選び、収集していたことを確認した。

(2) (1) の研究成果をもとに、やまと絵を視座においた国際研究会、シンポジウムを開催することで、明治期に形成された日本美術史は、日・英・米の日本美術史観が相互に影響を与えながら形成されたことを確認した。

研究成果の概要(英文)：

The main achievements of this study are as follows:

(1) With regard to Japanese art works collected in the UK and USA during the Meiji period, we checked the collected works and the way they were classified. Further, we checked the collections of books on the history of painting in Japan (*gashi*) and writings on painting theory (*garan*), as well as collections owned by researchers and collectors. As the result, we learned that, in the UK, Japanese art works were mainly collected according to taxonomy and an attempt to systematically form the Japanese art history was made based on it. On the other hand, we learned that, in the USA, each collector selected Japanese art works according to his/her conscious decision.

(2) Based on the research findings described above in " (1) ", we held international workshops and symposiums centered on Yamato-e and observed there that the study of Japanese art history established in Meiji period developed through mutual influences on the views on Japanese art history in Japan, the UK, and USA.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合 計
2006年度			

2007年度			
2008年度	4,100,000	1,230,000	5,330,000
2009年度	3,100,000	930,000	4,030,000
2010年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
総計	10,600,000	3,180,000	13,780,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学 美学・美術史

キーワード：在外やまと絵コレクション・日本美術史形成・英の日本美術受容者・米の日本美術受容者・国際情報交換・やまと絵再評価・文化財アーカイブ

1. 研究開始当初の背景

欧米には膨大な数のやまと絵が存在している。しかしながら、そのほとんどは研究対象とされていない。技法や画題はもとより、粉本に基づきながら世襲的に継承されるという作画体制まで含め、やまと絵は日本的な絵画の有り様を象徴している。海外における日本美術史研究が年々進む中、やまと絵の研究が進まないのは、不自然に感じられた。これは、欧米での「日本の美術」と日本人のそれとが必ずしも一致していないのが原因であるのではないかと考えた。

本研究は、日・英・米に焦点を絞り、「日本美術史観」の差異を確認し、各国で進められてきた研究について、国際的な議論を行うことで、より、包括的な「日本美術史観」を再定義したいと考えた。

2. 研究の目的

(1) 研究目的1：明治期に来日した英・米研究者における「日本美術史観」について、YAMATO-Eを視座におきながら解明する。

やまと絵を視座においたのは、技法や画題、作画体制まで含め、日本的な絵画の有り様を象徴しているからである。やまと絵の位置づけを日・英・米で確認することにより、「日本美術史観」の相違が明確になると思われる。本研究では、英語圏からみた場合の概念を検討するため、YAMATO-Eという表記を用いた。

(2) 研究目的2：明治期に来日した英・米の研究者における「日本美術史観」が形成されたバックグラウンドについて解明する。

研究者やコレクターの「日本美術史観」は、かれらのバックグラウンドー歴史的・文化的背景・コレクション・日本美術に関する情報・研究者の所属階級・組織等ーに強く影響されている。海外の研究にも大いに耳を傾け、因果関係を明確にする。

(3) 研究目的3：明治期の日・英・米における「日本美術史観」の相違と相互の影響関係を解明する。

フェノロサやサトウ等を例に挙げるまで

もなく、明治期の日本美術史は、日・英・米の「日本美術史観」が相互に影響を与えながら形成されてきた。これまで不明であった相互の影響関係を明らかにする。

(4) 研究目的4：国や専門を超えたインターナショナル・ミーティング

これまでの日本美術史研究は、国ごとに進められてきた。しかし、このままでは各々が偏った見解しか得られず、研究自体が縮小化しかねない。本研究は、日本美術史がインターナショナルな学問として、今後も発展できるよう、「橋渡し」としての役割を担いたい。

3. 研究の方法

(1) YAMATO-Eを中心とした日本美術コレクションの分類と位置づけの確認

【イギリスの場合】

大英博物館、アシュモリアン美術館、ヴィクトリア&アルバート美術館が所蔵する明治期にわたった日本美術、特にYAMATO-Eの作品調査。

コレクションの中での分類、位置づけについての各館学芸員へのインタビュー。

【アメリカの場合】

ボストン美術館、フリア美術館、エール大学附属美術館が所蔵するYAMATO-Eの作品調査。

コレクションの中での分類、位置づけについての研究者、各館学芸員へのインタビュー

(2) 19世紀英・米における文化的背景が日本の美術史観に与えた影響について

【イギリスの場合】

サトウやアンダーソン、アストン等、先駆的英国人日本学者のネットワークについての調査

【アメリカの場合】

フェノロサやモース等の交友関係、フリアを含めたコレクション方針や分類方法、作品の位置づけ等の調査

(3) 英・米における日本美術に関する情報の確認

【イギリスの場合】

ケンブリッジ大学附属図書館やナショナ

ルアーカイブが所蔵する日本美術の画論書類の調査・分類

【アメリカの場合】

ボストン美術館附属図書館及びフリア美術館附属図書館が所蔵する日本美術の画論書類の調査・分類

(4) 英・米・日の研究者による情報交換

【2009 年度】

国際ワークショップ「19 世紀英・米における日本美術受容者たちの価値観—なぜ、やまと絵は浮世絵ほど評価されなかったのか—」(2009 年 9 月 23 日 於 ロンドン芸術大学)開催。キーノートスピーチとして渡邊俊夫(ロンドン芸術大学)を、ディスカッサンツとしてジョン・カーメンター(ロンドン大学)、ロジーナ・バックランド(大英博物館)を招聘。

【2010 年度】

国際シンポジウム「近世やまと絵再考」(2011 年 12 月 28 日 於 国際文化会館)開催。パネリストとして、メリッサ・マコーミック(ハーバード大学)、彬子女王(立命館大学)、高岸輝(東京工業大学)、瀬谷愛(東京国立博物館)、山口晃(アーティスト)を招聘。

4. 研究成果

(1) 明治期に来日した英・米研究者における YAMATO-E を視座においた「日本美術史観」の解明(研究目的 1)

イギリスにおける本格的な日本美術コレクションの形成は 19 世紀末～20 世紀初頭に始まる。本研究は大英博物館所蔵のアンダーソンコレクションを中心に検討を加えた。研究当初、YAMATO-E は、YAMATO=「日本を象徴する」絵画という意味で収集されたと推測したが、そうではないことを確認した。本コレクションは、当時、流行していた分類学が反映され、作品は網羅的に収集され、YAMATO-E もその中に含まれていたということが判明した。

アメリカの場合も、日本美術コレクションの形成は同じくこの時期に始まる。ボストン美術館の場合、同時は、フェノロサやモースらによって日本美術の作品が収集されている。これらの中に YAMATO-E も数多く含まれているが、「やまと絵」という分類は存在せず、土佐派・住吉派などの流派によって分けられていた。分類学の影響も認められるがイギリスのように徹底したものではなく、収集作品の傾向から、コレクター個人の意向によって選択的に収集されていたことが判明した。

(2) 明治期に来日した英・米の日本美術研究者のバックグラウンドについての解明(研究目的 2)

本研究では、主に 19 世紀末～20 世紀初

頭のイギリスにおける日本美術研究者の交友関係について考察を加えた。特に、注目したのは、ウィリアム・ジョージ・アストンの記した『アストン和書目録』と、その注記に登場するアーネスト・サトウ及び、ウィリアム・アンダーソンとの関係である。アストン、サトウは外交官で日本学研究者である。アンダーソンは外科医で日本美術のコレクターでもある。同目録はアストンの蔵書目録であるが、一部はサトウから貸与したものであった。また、その注記に「BM(大英博物館)のアンダーソン絵画目録を見よ」との指示が散見でき、日本美術に関する彼の学識をアストンが高く評価していたことが判明した。本研究では、イギリスにおけるこのような人的交流が基盤となり、日本美術史や美術観が形成されたことを確認した。

また、英・米ともに、明治期より大量の画論書が流入され、参考文献として活用されてきたことを、ケンブリッジ大学附属図書館、ボストン美術館附属図書館、フリア美術館附属図書館等で確認した。

(3) 明治期の日・英・米における「日本美術史観」の相違と相互の影響関係を解明(研究目的 3)

本研究では岡倉天心が東京美術学校で行った講義「日本美術史」(明治 23 年～25 年)の講義記録に注目した。近世やまと絵に関しては、徳川時代の項目の約 1%しかコメントが見出せず、その評価も決して高いものではなかった。土佐光信でさえも平治物語や伴大納言等の絵巻からの「剽窃」と述べているが、この概念は欧米から輸入されたものであり、天心の発言はこれに則ったものと考えられる。また、天心は住吉派で編纂された画論書『倭錦』について、流派設立の経緯に歴史的裏付けがないと批判している。ここでは、画史画伝といった伝承から、美術を歴史としてとらえようとする天心の強い意志を汲み取ることができる。これは、欧米の研究方法を学んだからこそその発言である。さらに、同講義では「粉本主義」を「島国根性」あるいは「鎖国主義」などの言葉で批判し、「世襲制」については「決して外国にはあらざるべし」と述べており、欧米の美術観の強い影響を見出すことができた。

英・米における日本からの影響としては、各々の国にもたらされた画史・画伝書からの影響が大きかった。また、大英博物館など、コレクションの早い時期から日本の鑑定士を呼び寄せており、かれらのコメント

(“Descriptive and Historical Catalogue of a Collection of Japanese and Chinese Paintings in the British Museum”の手書きの注記などに見出せる)も、日本美術を理解するための情報源として、強い影響力をもっていたことが判明した。

(4) 国や専門を超えたワークショップ及びシンポジウムの開催(研究目的4)

①「19世紀英・米における日本美術受容者たちの価値観—なぜ、やまと絵は浮世絵ほど評価されなかったのか—」(2009年9月23日 於 ロンドン芸術大学)を開催した。

このワークショップは、研究分担者である加藤哲弘が司会を担当し、研究代表者である下原が「やまと絵再考—江戸時代初期における住吉派を中心に」というタイトルで、続いてコアメンバーの渡辺俊夫(ロンドン芸術大学)が「琳派とジャポニスム」というタイトルでキーノートスピーチを行った。第1部では、研究分担者である山崎剛(金沢美術工芸大学)、ディスカッサンツであるジョン・カーペンター(ロンドン大学)、ロジーナ・バックランド(大英博物館)がキーノートスピーチに関する質問を行い、第2部では全員で「やまと絵・琳派・浮世絵の間にどのような美術的価値観・受容の差があるのか」についての討議を行った。イギリスにおける日本美術の受容については、当時の出版物(1914年に刊行されたクライブ・ベル著『アート』等)に見られる、美術に対する考え方が大きく影響していたのではないかと、また、19世紀末から20世紀初頭のイギリスにおいて、浮世絵を家に飾るというのは、生活様式としてのアーバニズムに適っていたのではないかと等の興味深い指摘もあり、イギリスにおける日本美術受容の在り方についての情報交換ができた。

②国際シンポジウム「近世やまと絵再考」(2011年12月28日 於 国際文化会館)を開催した。

このシンポジウムは「第I部 在外やまと絵—コレクションと日本美術観」、「第II部 近世やまと絵の社会的コンテクスト」、「第III部 近世やまと絵の現代性—やまと絵再評価」の3部から構成され、加藤(研究分担者)が司会を行った。

第I部ではパネリストである下原(研究代表者)が「明治期における日本美術観—岡倉天心のやまと絵評価を中心に—」について、彬子女王(立命館大学)が「イギリスにおける日本美術コレクションと日本美術観」について、メリッサ・マコーミック(ハーバード大学)が「アメリカにおける日本美術コレクションと日本美術観」について話し、その後、明治期における日本美術観、英米における日本美術コレクションと日本美術観についてディスカッションを行い、会場からの質問に答えた。

第II部は、パネリストである下原が「近世初期における古典文化復興と住吉派興隆について」、高岸輝(東京工業大学)が「やまと絵における古典の復興と再生」について、瀬谷愛(東京国立博物館)が「住吉慶恩から

住吉派へ」について話し、その後、やまと絵における古典の復興と再生、近世における住吉派興隆の意味についてディスカッションを行い、会場からの質問に答えた。

第III部は、下原が「近代美学における絵画観と近世やまと絵」と題し、住吉派の絵画—具慶筆「箱崎八幡宮縁起」—を紹介し、アイティストの山口晃氏が具慶作品についてコメントした。その後、会場からの質問に答えた。

本シンポジウムによって、これまで等閑視され、評価も決して高くなかった「近世やまと絵」を再評価する土台を築くことができた。

(5) その他

これまで、日本の研究者が未確認であった近世やまと絵の作品群を、ボストン美術館やフリア美術館等で調査することができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計15件)

(1) 下原美保、狩野派・住吉派・板谷派合作の大英博物館蔵「竹林七賢人図」について、『鹿児島大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編』、62、査読無、2011、pp1-10

(2) 加藤哲弘、ヴァールブルクとヴィックホフ—ヴィッラ・ファルネジーナにおける連続的物語叙述をめぐる—、『美学論究』、26、査読無、2011、pp1-25

(3) 加藤哲弘、方法としての受容美学、『美術フォーラム21』、23、査読無、2011、pp26-30

(4) 厩尾達哉、ケンブリッジ大学図書館蔵「アストン和書目録」について(11)、『鹿児島大学法文学部紀要 人文学科論集』、73、査読無、2011、pp59-77

(5) 石川千佳子、欧米における日本の画史・画論の受容について—米国調査報告を中心に—、『宮崎大学教育文化学部紀要』、23、査読無、2011、pp1-8

(6) 山崎剛、茶道具の歴史と加賀ゆかりの名品、『金沢都市民俗文化研究所 研究報告書』、2010、査読無、2011年、pp11-15

(7) 下原美保、愛宕神社旧蔵「三十六歌仙絵扁額」について、『鹿児島大学教育学部研究紀要 人文・社会科学篇』、61、査読無、2010、pp29-41

(8) 加藤哲弘、オリジナルとその保存・文化財アーカイブの可能性と限界、『“オリジナル”の行方—文化財アーカイブ構築のために』、東京文化財研究書、査読無、2010、pp259-270

(9) 石川千佳子、欧米における日本の画史・画論の受容について(一)—W. アンダーソン著“The Pictorial Arts of Japan”を中心に—、『宮崎大学教育文化

- 学部紀要』、22、査読無、2010、pp19-26
(10) 山崎剛、蒔絵技法の歴史と加賀蒔絵のはじまり、『金沢都市民俗文化研究所』、平成21年度、査読無、2010、pp44-51
(11) 帛尾達哉、ケンブリッジ大学図書館蔵「アストン和書目録」について」(10)、『鹿児島大学法文学部紀要 人文学科論集』、71、査読無、2009、pp47-61
(12) 下原美保、住吉如慶・具慶によるやまと絵制作について—画題の傾向を中心に—、『鹿児島大学教育学部研究紀要人文・社会科学篇』、60、査読無、2008、pp237-253
(13) 加藤哲弘、文様研究の理論的基礎——リーグルによる『様式への問い』をめぐる——、『美学論究』、24、査読無、2008、pp1-16
(14) 帛尾達哉、ケンブリッジ大学図書館蔵「アストン和書目録」について」(9)、『鹿児島大学法文学部紀要 人文学科論集』、69、査読無、2008、pp59-74
(15) 石川千佳子、美術史の中の日韓関係、‘A Contrastive of Humanities and Design in Korea and Japan’、査読無、2008、pp61-64

〔学会発表〕(計7件)

【学会発表】

(1) Tetsuhiro KATO、‘Pathosformel’ in Japanese Art:Hidden Genealogy of Rhetorical Bodily Expressions、18th International Congress of Aesthetics、北京大学(中国)、2010年8月12日

【シンポジウム】

(2) 下原美保(パネリスト)、I 明治期における日本美術史観—岡倉天心のやまと絵観を中心に—、II 近世初期における古典文化復興と住吉派興隆について、III 近代美学における絵画観と近世やまと絵、近世やまと絵再考、2010年12月28日、於 国際文化会館

(3) 加藤哲弘(司会)、(同上)

(4) 石川千佳子(パネリスト)、美術史の中の日韓関係、第16回順天大学—宮崎大学学術交流シンポジウム、2008年12月12日、於 順天大学

【ワークショップ】

(5) 加藤哲弘(司会)、19世紀英・米における日本美術受容者たちの価値観—なぜ、やまと絵は浮世絵ほど評価されなかったのか—、2009年9月28日、於 ロンドン芸術大学

(6) 下原美保(キーノートスピーカー)、(同上)

(7) 山崎剛(ディスカッサンツ)、(同上)

〔図書〕(計2件)

(1) 加藤哲弘、名画と遊ぶ?—福田美蘭と

《ラスメニーナス》—、『トリック・アートの世界』展カタログ、2009、pp13-20

(2) 山崎剛他31名、美術史の余白に—工芸・アール・現代美術—、「工芸」シンポジウム記録集編集委員会編、美学出版、2008、pp67-75(419)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

下原 美保 (SHIMOHARA MIHO)

鹿児島大学・教育学部・教授

研究者番号：20284862

(2) 研究分担者

加藤 哲弘 (KATO TETSUHIRO)

関西学院大学・文学部・教授

研究者番号：60152724

帛尾 達哉 (TORAO TATSUYA)

鹿児島大学・法文学部・教授

研究者番号：30164065

石川 千佳子 (ISHIKAWA CHIKAKO)

宮崎大学・教育文化学部・教授

研究者番号：10184483

山崎 剛 (YAMAZAKI TSUYOSHI)

金沢美術工業大学・美術工芸学部・准教授

研究者番号：70210391